The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	上博楚簡『申公臣霊王』の全体構造
Author(s)	草野, 友子
Citation	中国研究集刊. 2010, 50, p. 269-279
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60974
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　玉号（総五十号）平成二十二年一月　二六九―二七九頁

上博楚簡『申公臣靈王』の全体構造

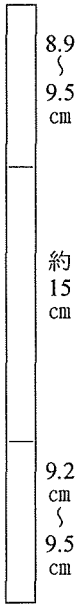
草野友子

本稿は、『上海博物館蔵戦国楚竹書（六）』（馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇七年七月。以下、上博楚簡と称す）（注1）所収の『申公臣靈王』を取り上げ、文献全体を釈読した上で、その全体構造を明らかにするものである。

一、釈読

まず、本篇の書誌情報を確認しておこう。

「釈文考釈」（以下、原釈文）の担当者は、陳佩芬氏である。『申公臣靈王』は『莊王既成』との合篇であり、竹簡は全九簡、前篇『莊王既成』の末尾句と後篇『申公臣靈王』の冒頭句は第四簡にあり、墨釘によって分割されている。全て完簡。簡長は三十三・一～三十三・八cm。編綫は両道。右契口。簡端は平斉。図示すると次のようになる。



篇題はなく、内容によって名付けられた仮称である。総字数は百十七字。全て完簡であるため、通読できる。最終簡（第九簡）には、墨鉤と留白があり、本篇の文末であることを示している。

陳佩芬氏は本篇の内容について、「楚の王子回（囲）と申公とが王位を争い、その結果、申公が「君王の臣」となることを願った」と説明しているが、実際は、楚の王子囲（後の靈王）と陳公子皇（穿封戌）との間に起こった、捕虜（鄭の皇頡）をめぐる争いに関する文献である。

以下、「凡例」「原文」「釈文」「訓読」「和釈」「語注」

の順に掲げる。

【凡例】

・〈　〉内の算用数字は、竹簡番号を示す。（『荘王既成』との連番のため、第四簡から第九簡までとなっている。）

・「原文」は、原釈文の隷定・句読点に従っている。「釈文」以降は文字を新字に改め、句読点については筆者の意見を反映させている。

・「釈文」は、原釈文と異説とを参考にして、筆者が最終的に確定したものを掲載している。

・「和釈」中の（　）は、その直前の語句や内容に関する補足説明等を行ったもの、［　］は、筆者が文意を明らかにするために語句を補ったものである。

・「語注」には、紙幅の都合上、筆者が重要と判断した説のみを掲載する。諸氏の説を提示する際には、その氏名のみを掲げる。論文・札記の題目、掲載年月日等については、本稿末尾の「参考文献」に列記している。

・「▲」は墨鉤を示す。

【原文】

哉於析述、繒公子皇昔皇子。〈4〉王子回敓之繒公爭之、王子回立爲王。繒公子皇見王、王曰、「繒公〈5〉忘夫析述之下虖。」繒公曰、「臣不智君王㴱爲君、女臣智君王〈6〉之爲君、臣㴱或至安。」王曰、「不毅㠯芙繒公、氏言棄之、含日〈7〉繒公事不毅、必㠯氏心。」繒公全拜、迍酓、「臣爲君王臣、君王孕之〈8〉死、不㠯晨釵𡈼、可敢心之又。」▲〈9〉

【釈文】

禦於棘遂、陳公子皇囚皇子。王子囲奪之、陳公爭之。

王子囲立為王。

陳公子皇見王。王曰、「陳公忘夫棘遂之下乎。」陳公曰、「臣不知君王之将為君。如臣知君王之為君、臣将有致焉。」王曰、「不毅以笑。陳公是言棄之。今日陳公事不毅、必以是心。」陳公跪拜、起答、「臣為君王臣。君王免之死、不以振斧質。何慊心之有。」

【訓読】

棘遂に禦がれ、陳公子皇 皇子を囚う。王子囲 之を奪わんとし、陳公 之を争う。

王子囲 立ちて王と為る。

陳公子皇 王に見ゆ。王曰く、「陳公 夫の棘遂の下を忘れんか。」と。陳公曰く、「臣 君王の将に君と為らんとするを知らず。如し臣 君王の君と為るを知れば、臣 将

に致すこと有らん。」と。王曰く、「不穀 以て笑わん。陳公 是の言 之を棄てよ。今日より陳公は不穀に事うるに、必ず是心を以てせよ。」と。陳公 跪きて拝し、起ちて答う、「臣 君王の臣為り。君王 之が死を免じ、以て斧質を振わず。何ぞ慊心 之れ有らん。」と。

【和釈】

〔楚は鄭の城麇に進軍したが、鄭の皇頡に〕棘遂で防御されたので、陳公子皇（穿封戌）は皇子（鄭の皇頡）を囚えた。〔楚の〕王子囲はこれ（皇頡）を奪おうとし、陳公子皇はこれ（皇頡）を〔王子囲と〕争った。

〔六年後、〕王子囲は立って王（霊王）となった。

〔さらに七年後、〕陳公子皇は王に謁見した。王は言った、「陳公はあの棘遂の一件を忘れたのではないだろうな。」と。陳公は言った、「臣（私、陳公）は〔当時、〕君王が国君となろうとしていることを知りませんでした。もし私が君王が国君になると知っていれば、私はまさに〔あなたを死に〕至らせたことでしょう。」と。王は言った、「私は笑おうではないか。陳公はこの言を棄てよ。今日から陳公は私に事えるのに、必ず良き心をもってせよ。」と。陳公は跪いて拝し、立って答えた、「臣（私、陳公）は君王の臣下です。君王はこれ（私）の死を免じ、斧質（刑具）を振わずにいてくださいました。どうして不満の心がありましょうか。」と。

【語注】

（1）哉於析述

原釈文では、「哉」を「吾」と釈読し（「哉公周童耳」（包山楚簡・第一三四簡））、「析」は地名であり（「秦人過析」（『左伝』僖公二十五年伝）、「析、楚邑、一名白羽。」（杜預注））、今の河南省内郷県西北に当たるとする。

一方、陳偉氏は「哉」は「禦」と読むのではないかと指摘する。また、「析」は「朽」であるとし、本篇は楚の霊王と穿封戌とに関する故事であることから、城麇あるいは城麇一帯の地名であろうと推測している。李学勤氏も「哉」を「禦」と釈読する。何有祖氏は「敔」と隷定し、陳剣氏が『三徳』第十七簡で「敔」を「禁」と釈読しているため、「禁」であるとする。また、「朽」を「棘」と読み（「如矢棘斯」（『詩経』小雅・斯幹）、「棘…（中略）…『韓詩』作朽。」（『経典釈文』毛詩音義））、「述」は楚簡中に「遂」と読む例が多く見られることから、「遂」と釈読する。凡国棟氏は、何有祖氏に従い、「朽」を「棘」と、「述」を「遂」と釈読し、「棘遂」という地名であるとする。そして、『左伝』襄公二十四年に「楚子伐鄭以救

斉、門於東門、次於棘沢。」とあることから、鄭の東門にある「棘沢」である可能性を指摘する。

この箇所は、原釈文の解釈では文意が不明である。「哉」については、何有祖氏が指摘するように、字形から「敔」と隷定することができる。また、楚簡中には、「哉」を「敔」と釈読する例も見られる（『従政（甲）』第十七簡）。さらに、『説文解字』に「敔、禁也。从攴吾声。」、その段玉裁注に「与圉・禦音同。…（中略）…則敔為禁・禦本字、禦行敔而廃。」とあることから、「敔」は「禦」と読み替えることが可能である。従って、「敔」と隷定し、「禦」と釈読する。『左伝』襄公二十六年伝に「楚子、秦人、侵吳、及雩婁。聞吳有備而還、遂侵鄭。五月、至于城麇。鄭皇頡戍之、出与楚師戦、敗。穿封戌囚皇頡。公子囲与之争之。」とあり、楚が鄭に侵入した際、鄭の皇頡が城麇を守ったと記載されていることから、「禦」は「ふせぐ」の意味で解釈する。

「析述」については、『左伝』襄公二十六年伝の記述を踏まえると、城麇あるいはその付近の地名である可能性が高いが、それに相当する具体的な地名は未詳である。ここでは、何有祖氏・凡国棟氏の解釈に従って「棘遂」と釈読する。

（2）繒公子皇耆皇子

原釈文は、「繒公」を「申公」として、春秋時代の楚の屈巫申に封じられた、巫臣または申公巫臣（字は子靈）のことであるとする。また、「耆」を「首」と釈読し、「皇首皇子」は第一子の皇子である申公のことを指すとする。そして、申公は楚の荘王・共王の時から政治的影響があった人物であり、本篇は申公と王子囲とが王位を争っているという内容であると述べる。

一方、陳偉氏は、「申」を「陳」と釈読する（郭店楚簡『緇衣』第十九簡・第三十九簡や、上博楚簡『緇衣』第十簡・第二十簡に見える「君陳」の「陳」は「申」に従って作られているため）。そして、「陳公」とは穿封戌のことであり、「子皇」の「皇」とは穿封戌の字であるとする。さらに、「皇子」は鄭の皇頡を指すと述べる。また、「耆」は「止」であり、『左伝』襄公二十六年の事件が背景にあることを指摘して、「囚」ではないかと推測する。沈培氏は「耆」は「戴」であり、「得」（捕獲の意）と釈読している。

陳偉氏が指摘するように、本篇は『左伝』襄公二十六年の事件について記載されたものであり、原釈文は誤った解釈を提示している。穿封戌は、楚軍を従えて鄭を侵略し、城麇で皇頡を囚えた。その際、王子囲（後の靈王）と皇頡をめぐって争い、その結果、穿封戌が敗れ、王子

囲が捕虜である皇頡を連行した。後に、穿封戌は霊王によって陳の県尹に任命された（詳細は、第二章にて後述）。この箇所は、陳公（穿封戌）が皇頡を捕らえた場面であるため、陳偉氏の解釈に従って「陳公子皇囚皇子」と釈読した。

（3）王子回敓之

「王子回」とは「王子囲」、すなわち春秋時代の楚の王である霊王を指す。楚の共王の次子で、康王の弟。『史記』楚世家によると、王子囲は王に即位した後に諸侯の兵力をもって呉を攻め、朱方を破り、斉の慶封を殺し、後に陳・蔡を滅ぼした。また、徐を攻めて呉を脅し、人々は夫役に苦しんだ。公子比や公子棄疾らは太子禄を攻め殺し、公子比を立てて王としたため、霊王の軍は動揺し、戦わないうちに破れた。そして、霊王は乾谿より西に逃げ、芋尹の申該の家で死亡した。在位、前五四〇～前五二九。

「敓」については、原釈文は「奪」と釈読し（「強取也。」（『説文解字』支部）、「此是争敓正字、後人叚「奪」行而「敓」廃。」（段玉裁注））、「奪之」とは楚の国君の位を奪い取ったことを指すとする。

「敓」を「奪」と釈読することには従うが、この箇所は、王位の争奪ではなく、王子囲（霊王）と陳公子皇（穿封戌）とによる皇頡（捕虜）の争奪について書かれていることから、原釈文の解釈には従わない。

（4）繒公子皇見王

原釈文は、「皇」を「惶」と釈読し、憂い恐れるの意であるとする（「惶、恐也。从心、皇声。」（『説文解字』心部）、「惶、懼也。」（『広雅』釈詁））。しかし、前述の通り、これは「陳公子皇」という人名であるため、原釈文の解釈には従わない。

（5）繒公忘夫析述之下虖

「析述」は、前述の通り、「棘遂」（地名）と釈読する。ここでの「下」とは、棘遂の一件のことを指すと推測される。

（6）臣牒或至安

原釈文は、「或」は未定の辞（「殷其弗或乱正四方。」（『書経』微子）、「或者、不定之辞。」（孔穎達疏）、「或言二百余歳」（『史記』老荘申韓列伝）、「或、疑辞也。」（『史記正義』））、「至安」は「致焉」（音通）であるとして、「臣将或致焉」と釈読する。

一方、陳偉氏は、「或」を「有」、「至安」を「致焉」と釈読し、「臣将有致焉」とする。そして、「致」とは『左伝』昭公八年伝の記述（「若知君之及此、臣必致死礼以息楚。」）にある「致死」の意味であると述べる。

この箇所については、『左伝』昭公八年伝に、「使穿封戌為陳公曰、「城麇之役不諂。」侍飲酒於王。王曰、「城麇之役、女知寡人之及此、女其辟寡人乎。」対曰、「若知君之及此、臣必致死礼以息楚。」」とあり、本篇はこれに関連する事柄であることから、陳偉氏の解釈に従って「臣将有致焉」と釈読する。

（7）氏言棄之

原釈文は、「氏」と「是」とは音通することから、「氏言」を「是言」と釈読する（「氏、叚借為是。」（『説文通訓定声』））。また、「棄之」は、廃するの意であるとする（「水官棄矣。」（『左伝』昭公二十九年伝）、「棄、廃也。」（杜預注）、「棄稷弗務。」（『国語』周語上）、「棄、廃也。」（韋昭注））。この解釈に従う。

（8）必㠯氏心

原釈文は、「氏心」を「是心」と釈読し、良き心の意であるとする（「其所是焉誠美。」（『荀子』富国）、「是、善也。」（楊倞注））。「氏」と「是」とは音通することから、この解釈に従う。

（9）繒公圣拜

原釈文は、「圣」を「坐」と釈読する（「先生書策琴瑟在前、坐而遷之。」（『礼記』曲礼）、「坐、通名跪。跪名不通坐也。」（孔穎達疏））。そして、「拝」は、「跪」の意であるとする（「跪、拝也。从足、危声。」（『説文解字』足部）。

一方、陳偉氏は、「圣」は「危」と釈読でき、「跪」の本字であると指摘する。

陳偉氏が指摘するように、「圣」は楚系文字上で「危」と釈読できる字形であるから、「陳公跪拝」と釈読する。

（10）不㠯晨鈙𡉚

原釈文は、「不以辰扶歩」と釈読とする。「鈙」は「鉄」の仮字であり、「扶」であるとする（「扶、左也。从手、夫声。」（『説文解字』手部））。「𡉚」は包山楚簡で「歩」とされていることから、「歩」とし（「歩、行也。」（『説文解字』止部））、「扶歩」とは「扶行」のことであると述べる。

一方、陳偉氏は、「晨」は「辱」の誤写で、謙譲の言葉ではないかと指摘する。「鈙」については「斧」もしくは「鉄」と、「𡉚」については上博楚簡『周易』第四簡と上博楚簡『慎子曰恭俭』第一簡に見える字であることを指摘して、「質」と釈読する。「斧質」「鉄質」とは、古代の刑具を指す。何有祖氏も陳偉氏の解釈に従い、「斧質」と釈読し、さらに「質」は「鑕」である可能性も指摘する。「斧鑕」とは、斧と枕木のことで、刑が執行される時に人を枕木の上に乗せ、斧で切り落とすという古代の刑

具である（「寡君是事畢矣、嬰無斧鑕之罪、請辞而行。」（『晏子春秋』問下）、「孰与身伏質、妻子為戮乎。」（『漢書』項籍伝）、「質謂鑕也。古者斬人、加於鑕上而斫之也。」（顔師古注））。また、「晨」は「震」あるいは「振」と読めることを指摘する（「夫兵戢而時動、動則威。観則玩、玩則無震。」（『国語』周語下）、「震、振也、興也。」（王引之『経義述聞』国語下））。そして、「震斧鑕」とは陳公に対して斧鑕の刑を施すことによって威勢を振るう、という意味であるとする。楊沢生氏は、「唇斧鑕」の主語は「臣」（陳公）であるから、おそらく「伏」の字のようなものであると指摘する（「遂伏斧鑕、曰、命在君。」（『韓詩外伝』））。金克兀氏は、「唇」と隷定し、「抵斧鉞之罪」という語が伝世文献に見えることから、「抵」と釈読し（「臣不佞、不能奉承先王之教、以順左右之心、恐抵斧鉞之罪、以傷先王之明、而又害於足下之義、故遁逃奔趙。」『戦国策』燕策）、「伏」のような意味であるとして、この句の主語を「君王」（すなわち霊王）と解釈する。

原釈文の解釈では、文意が不明である。ここでは、何有祖氏に従って「晨」を「振」と、陳偉氏・何有祖氏に従って「鈙𡉚」を「斧質（鑕）」（腰切り・銅切りをするための刑具）と釈読し、「不以振斧質（鑕）」とは霊王が穿封戌に対して斧質（刑具）を振るわなかった（処罰しなかった）、と解釈する。

（11）可敢心之又■

原釈文は、「何敢心是有」として、「どうして敢えて不善の心があろうか」という意味であると解釈する。

一方、郝士宏氏は、「敢」は「侵犯」「冒犯」の意（「敢、犯也。」（『広雅』釈詁））、あるいは「険」と読んで、「険心」（陰険な下心）を指すのではないかと述べる。李学勤氏は、「何敢心之有」の「心」とは、争奪の心か、あるいは「心」の上に脱字が一字あるのではないかと指摘する。楊沢生氏は、「敢」と「慊」とが音通することから、「慊」と読むべきではないかとする。「慊」とは不満の意味であり、「慊心」とは満足していない心のことを指す（「曾子曰、「晋楚之富、不可及也。彼以其富、我以吾仁。彼以其爵、我以吾義、吾何慊乎哉。」（『孟子』公孫丑下）、「慊、少也。」（趙岐注））。

ここでは、穿封戌が霊王の許しを得たことに対する穿封戌の発言箇所であり、「敢」と「慊」とが音通することから、楊沢生氏の解釈に従って「何敢心之有」と釈読した。

「■」は、文末を示す墨鉤。下に留白があるため、篇末であることを示している。

二、全体構造

本篇は一見、短い文献であるが、本篇を理解するためには、その背景をおさえておく必要がある。本篇は、『左伝』と対照させることにより、その全体像が見える文献である。そこで、以下、『左伝』との対照表によって、本篇の内容とその全体構造を明らかにしていきたい。

【対照表】

『左伝』	『申公臣霊王』
（襄公二十六年伝）［前五四七］ ①楚子、秦人、侵吳、及雩婁。聞吳有備而還、遂侵鄭。五月、至于城麇。鄭皇頡戍之、出与楚師戰、敗。穿封戌囚皇頡。公子囲与之争之。 ②正於伯州犂。伯州犂曰、「請問於囚。」乃立囚。伯州犂曰、「所争、君子也、其何不知。」上其手曰、「夫子為王子囲、寡君之貴介弟也。」下其手曰、「此子為穿封戌。方城外之県尹也。誰獲子。」囚曰、「頡遇王子弱焉。」戌怒、抽戈逐王子囲、弗及。楚人以皇頡帰。	A禦於棘遂、陳公子皇囚皇子。王子囲奪之、陳公争之。
（昭公元年伝）［前五四一］ ③冬、楚公子囲将聘于鄭。伍挙為介。未出竟、聞王有疾而還、伍挙遂聘。十一月己酉、公子囲至、入問王疾、縊而弑之、遂殺其二子幕及平夏。右尹子干出奔晋、宮厩尹子晳出奔鄭。殺大宰伯州犂于郟、葬王于郟、謂之郟敖。使赴于鄭。伍挙問応為後之辞焉。対曰、「寡大夫囲。」伍挙更之曰、「共王之子囲為長。」（…中略…）楚霊王即位、薳罷為令尹、薳啓彊為大宰。	B王子囲立為王。
（昭公八年伝）［前五三四］ ④使穿封戌為陳公曰、「城麇之役不諂。」侍飲酒於王。王曰、「城麇之役、女知寡人之及此、女其辟寡人乎。」対曰、「若知君之及此、臣必致死礼以息楚。」	C陳公子皇見王。王曰、「陳公忘夫棘遂之下乎。」陳公曰、「臣不知君王之将為君。如臣知君王之為君、臣将有致焉。」 D王曰、「不穀以笑。陳公是言棄之。今日陳公事不穀、必以是心。」陳公跪拝、起答、「臣為君王臣。君王免之死、不以振斧質。何慊心之有。」

まず、①～④の内容を確認しよう。

①楚子（楚の康王）と秦人が呉を攻めようとして雩婁に行ったが、呉には固い備えがあると聞いて引き返し、鄭を攻めた。五月に鄭の城麇に進軍したところ、鄭の大夫である皇頡がそこを守っていた。皇頡は自ら出向いて楚軍と戦うも、敗北。皇頡は楚の穿封戌によって捕らえられるが、皇頡をめぐって穿封戌と楚の王子囲（後の霊王）とが争うこととなる。

そこで、②伯州犂は、捕虜である皇頡を証人として立たせた。伯州犂は皇頡に、「争っているどちらも君子であり、それをどうして知らないことがあろうか。」と言い、手を上に上げて「あの方は王子囲であり、王（康王）の弟君である。」と、手を下に下げて「こちらは穿封戌であり、方城外の県尹である。どちらがお前を捕らえたのか。」と言った。すると皇頡は、「自分は王子囲に会って捕らえられた」と述べた。穿封戌は立腹し、戈を抜いて王子囲を追いかけたが、追いつかなかった。そうして楚人は皇頡を連れ帰った。

③は、①・②の六年後のことである。冬、楚の王子囲は鄭を聘問しようとし、伍挙はその補佐をした。そして、まだ国境を出ないうちに楚王が病気になったと聞いて王子囲は引き返し、伍挙はそのまま鄭を聘問した。十一月己酉の日、王子囲は王宮に戻り、病気について問うふりをして王の首を絞めて殺し、王の二子である幕と平夏をも殺害した。これにより、右尹の子干（公子比）は晋に出奔、宮厩尹の子皙（公子黒肱）も鄭に出奔した。王子囲はさらに太宰の伯州犂を郟で殺害し、楚王の亡骸を郟に埋葬して郟敖と名付けた。王の死を鄭に告げさせると、鄭に使いに行っていた伍挙が使者に対して、後継者の名を尋ねた。すると使者は「寡大夫囲」と答えたため、伍挙はそれを改めて「共王の子の囲が年長である」と言った。

そして、ついに王子囲が楚の霊王として即位し、薳罷を令尹に、薳啓彊を太宰に任命した。

④は、さらにその七年後の出来事である。楚の霊王は穿封戌を陳の県尹に任命し、「お前は城麇の役の時に諂わなかった」と言った。そして、酒宴が開かれ、霊王が穿封戌に対して「城麇の役の時、私が王となることを知っていれば、お前は私に功績を譲ったであろう。」と言うと、穿封戌は「もしわが君が今日のようになると知っていれば、私は必ず王を死に至らせ、礼を守って楚の国を安定させたことでしょう。」と答えた。

以上が『左伝』に記載されている内容である。では、『左伝』と『申公臣霊王』との相違点はどのようなもの

であろうか。

まず、『申公臣霊王』では、Aのように、冒頭に王子囲（霊王）と陳公（穿封戌）とが捕虜である皇子（皇頡）をめぐって争ったことが記載されているが、その詳細は書かれていない。それは楚において常識的な話、すなわち読者に共有されていた著名な話であったからであろう。また、本篇では捕虜の皇頡のその後についても書かれておらず、これも周知の事実であったためだと考えられる。

捕虜となった皇頡の争奪を行った地については、『左伝』では「城麇」となっており、本篇では「棘遂」となっている。語注（1）で示したように、「棘遂」は城麇あるいはその付近の地名と考えられるが、「棘沢」であると可能性もある。『左伝』襄公二十四年伝には、「冬、楚子伐鄭以救斉、門于東門。次于棘沢。諸侯還救鄭。」とあり、楚軍が鄭の東門を攻め、鄭の棘沢に軍を留めたという事件が記されている。棘沢の事件が襄公二十四年、城麇の事件が襄公二十六年であり、年代と場所とが接近しているために混同して書かれた可能性も考えられる。

Bについては、王子囲が王に即位したという極めて簡潔な記載のみで、③のような詳細は一切書かれていない。

④では、穿封戌は霊王に諂わないという、一貫した態度を示している。穿封戌は、霊王が王となるのを知っていれば、城麇の事件の時に霊王を死に至らせ、楚の国を安定させたという過激な発言をする。Cにおいても、穿封戌は霊王に対して④と同様の発言をしている。ただし、『左伝』の記述はここで終わり、その結末は書かれていないのに対し、『申公臣霊王』では、霊王の反応とそれに対する穿封戌の発言が記されている。

Dにおいて霊王は、過去の出来事は笑って水に流そうと穿封戌をなだめて、良き臣下として仕えるように促す。すなわち、寛大な態度で接する霊王の姿が描かれているのである。そして、それを聞いた穿封戌は態度を翻し、自身に対して刑罰を下さなかった霊王の臣下となることを表明する。つまり、Dでは霊王と穿封戌とが和解する場面が描かれているのである。これは、本篇の特色であると言えよう。

以上、本篇の内容と、その全体構造が明らかとなった。本篇の前半部分については、霊王と穿封戌とに関する事柄について極めて簡潔に記載されていた。詳細を省略しているのは、本篇が楚の人の手によって書かれた楚の在地性文献であり、読者にとって周知の事実であったからであろう(注2)。また、本篇の後半部分には、伝世文献には描かれていない霊王と穿封戌との問答が記されている。すなわち本篇は、霊王と穿封戌との関係を映し出す、重

要な一資料であると言えるのである。

注

（1）上博楚簡の書写年代については、周知の通り、二二五七±六五年前という中国科学院上海原子核研究所の炭素十四の測定値が紹介されている（「馬承源先生談上海簡」、『上博館蔵戦国楚竹書研究』、上海書店出版社、二〇〇二年）。一九五〇年を定点とする国際基準に従えば、前三〇八±六五年、すなわち前三七三年から前二四三年となり、下限は秦の将軍白起が郢を占領した前二七八年となる可能性が高いことから、書写年代は前三七三年から前二七八年の間と推定される。

（2）なお、二〇〇九年八月現在までに公開された上博楚簡中の楚の在地性文献は、『昭王毀室』『昭王与龔之脽』『柬大王泊旱』『莊王既成』『申公臣靈王』『平王問鄭寿』『平王与王子木』『鄭子家喪』『君人者何必安哉』の九篇である。

【参考文献】

■「簡帛網」（http://www.bsm.org.cn/）

・陳偉「読《上博六》條記」、二〇〇七年七月九日。

・何有祖「読《上博六》札記」、二〇〇七年七月九日。

・凡国棟「読《上博楚竹書六》記」、二〇〇七年七月九日。

・沈培「試釈戦国時代从"之"从"首（或从'頁'）"之字」、二〇〇七年七月十七日。

・郝士宏「初読《上博簡（六）》」、二〇〇七年七月二十一日。

・楊沢生「読《上博（六）》劄記（三則）」、二〇〇七年七月二十四日。

・范常喜「読《上博（六）》札記六則」、二〇〇七年七月二十五日。

・劉信芳「説穿封戌之"心"」、二〇〇七年八月二十一日。

■「清華大学簡帛研究」（http://www.confucius2000.com/admin/lanmu2/jianbo.htm）

・李学勤「読上博簡《莊王既成》両章筆記」、二〇〇七年七月十六日。

■「簡帛研究」（http://www.jianbo.org/）

・張崇礼「読《莊王既成　申公臣靈王》劄記」、二〇〇七年八月七日。

■「復旦大学出土文献与古文字研究中心」（http://www.guwenzi.com/Default.asp）

・金克兀「関於《上博六・申公臣靈王》"不以斧層質"的猜想」、二〇〇八年一月十四日。

［付記］本稿は、平成二十一年度日本学術振興会・科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。